

3回生は12月の着手発表会を終えて、本格的な就職活動に突入した。4回生は1月末の卒業論文の提出と2月初めの卒論審査会を経て、37名が卒業することになった。データを集めるために調査すること、調査結果を分析すること、論文を執筆することだけでなく、大人数を前にして発表して質疑応答ができること、審査コメントを受けて論文をよりよくするために文章を修正できること、のいずれもが社会人の基礎力として役立つであろう。

ここ数年、学科事務員の変動があり、教員の異動も多く、学科業務が混乱することもあった。今年度は事務員の増田さんが、年間スケジュールを把握された上で、1年を通じて勤務していただいたので、滞りなく学科業務を遂行できたと思う。学部長控室のスタッフの皆様とともに、学科スタッフの増田さんには日頃からの学生と教員への支援に感謝したい。

環境建築デザイン学科のこの一年

村上 修一

環境建築デザイン学科長

教員メンバーについては、昨年度に引き続き、今年度も変化のない一年であった。欠員となっていた1名については、下半期、公募による選考が順調に進み、来年度4月より新たなメンバーを迎えることとなった。しばらくこの体制が続くことになるであろう。学科内に昨年度立ち上げた「カリキュラム検討委員会」では、必要な講義科目を精査するとともに、3回生後期に選択科目として「設計演習4」を新設することを決め、実践教育の充実を図ったところである。

今年度の卒業研究では、15名の学生が論文を、32名が制作を行った。最終の発表会では、5名のゲスト講評者をお招きし、熱のこもった議論が交わされた。今年度は、論文、制作ともに、底上げのなされた感があった。「目的から結論に至るまでの論証性に優れ、かつ、環境建築デザインの新たな知見を得ており、社会に対するインパクトを有する研究（作品）をEA賞として選定する」こととなっているが、相当数がこの選定根拠に合致するのではないかと思わせるほどであった。なお、ゲスト講評者の一人、大井鉄也氏は本学科の卒業生である。昨年度に引き続き、新進気鋭の建築家として卒業生をお迎えできたことは喜ばしい。

また、「木の上設計グランプリ2018」準優勝をはじめ、設計競技等における学生作品の受賞、教員による実施設計作品等の雑誌掲載、教員が主導する研究室プロジェクトによる基本設計等のメデ

ィア発表、地域における制作活動・展示活動・ワークショップの実施など、今年度も、教員や学生の学外における多方面の活躍が見られた。「地域に根差し、世界に拓く」という本学科の特徴は、今年度も確実に受け継がれ、確かなものとなっているようである。

生物資源管理学科のこの一年

泉 泰弘

生物資源管理学科長

学部長裁量経費を使わせていただき、学科ホームページのリニューアルを行った。ウェブ作成業者との話し合いにより、まず本学科の学生を対象に現行ホームページの印象についてのアンケートを実施し、その結果を受けて「学科の顔」ともいえるトップページのデザインを中心に刷新することとなった。新トップページ、および追加したサブページは魅力的なものに仕上がったと考えるが、中身の充実はまだ十分手が回らなかったのは心残りである。

7月21・22日のオープンキャンパスでは「学科長が語る生物資源管理学科の魅力」というメニューが新たに加わり、来場者に向けて1日3回×2日の計6回話をするようになった。同じ内容を何度も繰り返すというのは思ったよりも難しいことであったが、回数をこなす内に要領が分かってきてアドリブも入れられるようになり楽しかった。来年度はもっと興味を引くような中身にしたい。もちろん私以外の学科教員にも展示・体験コーナー、圃場見学ツアーなど魅力的なメニューを提供していただいた。（ただし、両日とも猛暑の影響で午後の参加者が激減していたことから、とくに屋外でのイベントは時間帯の変更を考えるべきかもしれない。）

このような試みにどれほどの効果があったのか定かではないものの、2019年度入学試験（一般選抜）の志願倍率は前期日程が前年度の2.2倍から2.6倍、後期日程が同じく10.3倍から13.3倍へとともに増加した。とくに2018年度は全学部全学科を通しての最低かつ唯一の3倍未満であった前期の倍率が改善したことに安堵した。しかしながら、冷静に見ればブービーメーカーがブービーになっただけのことであるし、3倍に達していないことは一緒。とりあえずそこからの脱却を目指すべく、高校訪問は学部としての割り当て数をこなすにとどまらず、機会があれば足を運ぶなど、より積極的にアピールを行っていく必要を感じている。

全国農学系学部長会議（春および秋）、その東海・

近畿地区会議、さらに公立大学協会農学部会が開催され、最も遠方(函館)かつ授業と重なっていた1回を除き出席した。それら会議での報告の中でとくに印象に残ったのは、近年のゲリラ豪雨や台風によって付属農場や演習林が被害を受けたものの予算削減のため復旧もままならないという話である。本学の圃場実験施設でも台風や豪雪によって毎年のようにビニルハウスが倒壊しているだけに他人事とは思えなかった。また公立大学の会議では農業高校からの入学者に関する状況や取組について報告があった。お隣の県立大学の生物資源学部では農業高校からの推薦入学者を毎年1~2名受け入れており、さらに新学科の開設後は受け入れ枠の拡大を検討しているとのことであった。本学科も開学後しばらくは農業高校出身者が1名以上入学していたのであるが、学力不足による落伍者が少なくなかったこともあり、それが絶えてから久しい。既に工学部で実施されている推薦入試Bの採用などを検討すべき時期に入っているのかもしれない。もちろん入学後のフォローアップ体制を整えてからということになるが。なお、その推薦入試(本学科の実施はAのみ)であるが、来年度からは総合問題の出題を止めて共通テストを利用することになる。ここ数年の倍率がほぼ1倍で推移していただけに、どのような影響が出るか注目している。

9月には長浜バイオ大学との大学院研究交流会が開催された。第1回が先方での開催だったため、第2回は本学での開催となった。参加者数50名、ポスター発表の課題数15という盛会となり、両大学の院生による活発な研究交流が行われたのは喜ばしいが、ホームであるはずの本学からの参加者が1/3に留まったのは残念に思った。

今年度も数多くの教員が海外へ出張したが、11月には須戸教授が中国湖南省で開催された「中日湖沼洞庭湖—琵琶湖環境管理政策・法律研究センター」の設立記念式典、およびシンポジウムに理事長、学部長らとともに出席された。また2~3月には原田准教授と飯村助教が「アジア・フィールド実習I・II」に参加する学生の引率教員としてベトナムへ赴かれた。帰国後聞いたところでは、これを機にダナン大学工科大学との研究交流を模索するとのこと、実現に期待したい。

後期から畜産学を専門とされる中川敏法先生が助教として着任された。歓迎会にて披露された先生のご経歴は、(詳しくは書かないけれども)多くの大学教員のそれとは一味も二味も違うものであった。その稀少かつ貴重な人生経験を学生指導にも生かしていただけたらと願っている。

最後になるが、3月の卒業判定時に過年度生(2011~2014年入学)の大半が最終卒業判定で合格とな

ったこと、とくに2011年と2012年入学の学生がついに卒業まで漕ぎ着けられたのは感慨深い。この間サポートを続けて下さった指導教員、教務委員および学年担任の先生方に感謝したい。

環境科学研究科

環境動態学専攻のこの一年

須戸 幹

環境動態学専攻長

2018年度の在籍者は博士前期課程36名、後期課程7名であった。前期課程のうち1名は、文部科学省の「トビタテ留学! JAPAN」制度を利用し、10月から1年間の予定でアルゼンチンの大学ヘインターンシップの形で渡航している。前期課程で修士号を取得した15名のうち、4名が本学の後期課程へ進学し、他の修了生も新しい環境で研究者や技術者として新しい一歩を踏み出すことになった。後期課程では、Md. Rasheduzzaman氏が7月に博士号を取得した。修了生の益々の活躍が期待される。なお、前期課程に在学中の1名が亡くなる悲しい出来事もあった。謹んでお悔やみを申し上げます。

今年度、専攻として大きな決定を2つ行った。一つは、前期課程の一般選抜でこれまで筆記試験としていた英語を、2021年度実施の入試よりTOEIC公開テストのスコアに基づく評価に変更したことである。これにより、受験生が英語の実力を客観的に把握することができるとともに、絶え間ない英語のスキルアップにつながると考えている。

もう一つは、修士論文の最終版提出を来年度以降求めることである。修士論文が期限内に提出された後、論文の内容審査や発表会を経て学位の可否が決定される。今回の決定は、審査の過程で指摘された内容を反映した最終版の所在を明らかにするとともに、後進が完成版を参考できる環境を整えることに役立つと考えている。

専攻長の立場になって、院生との関わりをどこまで持てばよいのかを考える機会になった。数か月以上研究室に出てこなくなる学生がごく少数ではあるが、いることは事実である。研究の行き詰まりだけでなく、精神的なもの、人間関係、あるいはそれらの複合など、さまざまな原因があるはずである。一教員として、あるいは組織として原因を探り、状況を改善することは重要であるが、最も肝心なことは深刻化する前の対処だと考えている。今のところ妙案はないが、今まで以上に学生に気を配り、必要であれば声掛けや教員間、あるいはご両親との情報の共有など、少々お節介に